「一年又一年」について

—— 連続テレビドラマを通してみる中国の現在

石　井　康　一

1

「一年又一年」は1999年に中華人民共和国建国50周年を記念して放映された連続テレビドラマである。北京電視芸術中心（センター）制作，作者：李暁明，演出：李小龍・安戦軍，一回の本編が45分，全21集からなる。作者の李暁明は「渇望」(90)，「北京人在紐約」(92)，「過把癮」(93) などドラマのヒット作を次々と世に送り出してきた脚本家である。「一年又一年」は，北京を舞台にして，共産党幹部林漢民と映画館の映写技師陳福生の二つの家族の1978年から98年までの20年間の変遷が描かれている。以下この作品の中心人物を軸に物語を概括してドラマの特質を考察し，ドラマに反映される中国の歴史や文化を見ていきたい。

[主な登場人物と配役]

林漢民（父）：韓小磊，廖淑琴（母）：厳敏求

林一達（息子）：李鳴，朱群英（その妻）：沈丹萍，林平平（娘）：原華

陳福生（父）：滕汝俊，胡桂蘭（母）：宮景華

陳煥（息子）：許亜軍，陳青（娘）：劉莉莉，何大海（その夫）：劉威

陳小欧（娘）：何琳

潘起亮（近所の若者）：張晞臨

[陳煥と林平平]

78年，文化大革命の混乱を脱し，大学入試が復活する。陳煥は北京師範大学に合格するが，林平平は父親が文化大革命で批判され，まだ名誉回復されていなかったので，試験の点数は合格点に達しているのに不合格となる。父の名誉回復を経て二度目の入試で最高レベルの北京大学に合格した林平平は，卒業後はテレビ局（北京電視台）に就職する (82)。陳煥は大学で学問を続け，修士の学位を取得 (87)，社会主義の市場管理学を専門とする大学教員になる。林平平は新しい時代を作るドラマ部に移り，幼なじみである陳煥と結婚するが，現状に満足せず，テレビ局をやめてアメリカに留学する (86)。林平平は夫も共にアメリカに来ることを望んだが，陳煥は自分の専門を捨てて国を出ることを受け入れない。そしてアメリカに暮らし，アメリカを価値判断の基準とする林平平と陳煥の心の隔たりは大きくなり，林平平の依頼で来た弁護士の離婚届に陳煥はサインする (91)。林平平はアメリカ企業

の北京代表として帰ってくる（93）。しかし成功を象徴するような地位も，契約が打ち切られてしまうと（98），中国でもアメリカでも外国人扱いされて帰るところのない自分を発見する。そして陳煥の本当の愛を知る。別れてからも引かれ合う二人。しかし再び結ばれることはない。

陳煥が指導する大学院生于静は修士課程を出て就職したが，ずっと陳煥に思いを寄せていた。陳煥は林平平に「僕のことを大切に思ってくれる人がいるんだ。これ以上彼女を傷つけたくない」と告げる。林平平は于静と再婚する決意と受け取って「よかった。これで私も安心して出発できるわ」とアメリカへ帰っていく（98）。しかし陳煥は，

陳煥：（林平平は）もうアメリカに帰ったよ。
于静：私にとってはよくない知らせですね。
陳煥：どうして？
于静：離れているほど思いが深まる…遠くなればなるほど，余計に気になる…もし先生に今結婚してくださいって言ったら，承諾してくれますか？
陳煥：だめだ。
于静：どうしてですか？
陳煥：ほかの女性のことをずっと気にかけている夫なんて，いやだろう？
きっぱりと于静に告げ，生涯一人の女性を愛し続ける道を選ぶ。

［林一達と朱群英］

78年，四川省の人民公社の生産隊から北京に帰ってきた林一達は，下放先の食堂で働いていた朱群英を妻として連れていた。過酷で困難な生活の中で結ばれた二人だったが，党幹部の子弟であり都会の大学生であった夫と，小学校も二年しか行っていない田舎の娘とは，いろいろな面での格差が大きい。朱群英は勉強したいという向上心を夫にまともに受け止めてもらえず，「あの頃のように私を尊重して！私に関心を持って！」という声も届かない。改革開放経済の中で政府機関が作った貿易公司（かいしゃ）の仕事で金を儲けることにのめりこみ，妻には安らぎのみを求める夫との心の隔たりは大きくなる。料理の腕を買われた四川料理店で昼間だけ料理の手伝いをするようになった妻は，社会の中で生きがいを見つけ，夫との離婚を望むようになるが，夫にはその心情が理解できない。結局離婚し自身で四川料理店を経営するようになった朱群英は，自分を尊重してくれる同郷の仕事仲間と再婚する。

再婚した朱群英は新居の高級マンションに林一達を招く（97）。

朱群英：どうして私をじっと見るの？服が派手すぎるから？センスが悪いっていつも文句言われてたわね。
林一達：君が北京に来たころを思い出そうとしたんだけど，どうしても思い出せない。

朱群英：そんなに老けたかしら。

林一達：いや，大きく変わったということなんだ。完璧に都会人になったよ。それもお金持ちの都会人だ。

朱群英：本物の都会人になるのがずっと夢だったから…今は家庭も事業もうまくいってるし銀行には十分な貯金もあるし，田舎から出稼ぎに来る子と比べたら，すべてに満たされているといっていいわ…

そして元夫にお見合いの相手を紹介しようとする。

林一達：僕たちはもう無関係なのに，僕の生活に干渉しないでくれ。

朱群英：干渉してるのじゃないの，私自身にチャンスを…

林一達：どういうことなんだ。

朱群英：別れた時私もいっぱい悪いところがあった。あなたのことを悪く考えすぎていたの。私の一番の望みは，あなたも幸せになってくれること，そうしたら私も少し気持ちが楽になるし…

そして林一達は紹介された相手と再婚することにする。

[陳小欧と潘起亮]

潘起亮は待業青年（社会主義体制下での事実上の失業者）であり，何大海と組んでブローカーの仕事をしている。陳小欧とは幼なじみで，大人になってからも小欧にとっては何でも受け止めてくれる優しい兄貴分だった。食事を共にしたあとの会話（95）。

潘起亮：おまえももう結構な年だろ。

陳小欧：そう，もうすぐ30よ。

潘起亮：はやく結婚しろよ。

陳小欧：もらってくれる人がいないと。

潘起亮：おまえは望みが高いからな。

陳小欧：あなたも30半ば，やっぱり望みが高すぎるんじゃない？

潘起亮：今日，食事に誘ったのは，そのことを相談したかったからなんだ。

陳小欧：何のこと？

潘起亮：そのことだよ。さっき食べているときに何回も言おうとしたんだけど，言い出せなくて…

陳小欧：いまなら言いやすいんじゃない？

潘起亮：じゃ，言うから笑わないでくれよ。

陳小欧：笑わないから，言ってよ。

潘起亮：じゃあ…おれはある人のことが好きで…その人もおれに優しくしてくれるんだ…
陳小欧：優しくしてくれるからって，お嫁さんになってくれるとは限らないわ…
潘起亮：…もうOKしてくれたんだ。
陳小欧：誰がOKしたの？
潘起亮：昨日うちに来て…母さんもすごく喜んでくれてるんだ。
陳小欧：誰のこと言ってるの？
潘起亮：もちろん，おれの結婚相手だよ。食肉製品の工場で働いているんだ。これからはハムソーセージや豚の頭やテールが必要なときはおれに言ってくれよ。
陳小欧：いつ知り合ったの？どうして私が全然知らないの？
潘起亮：母さんが人に頼んで紹介してもらったんだ。知り合ってまだ二ヶ月だ。美人じゃないが，まじめでおとなしい人なんだ。いつか時間のあるときに会ってくれよ。おれの参謀役になってくれ。
陳小欧：結婚が決まるまで教えてくれないなんて，ちょっと遅すぎるんじゃない？
潘起亮：確かに…もっと早くに言うつもりだったけど…おまえへのおれの気持ち，知ってるだろ？
陳小欧：どんな気持ちよ？
潘起亮：怒ってる？
陳小欧：つまらないこと言わないで。あなたが結婚するのと私はどんな関係があるの。怒るわけないじゃない。
そして別れ際に
潘起亮：おれの気持ちが変わったんじゃない，これが運命だとあきらめたんだ。うちの母さんが言うとおり，おれはおまえにはふさわしくないよ…

陳小欧は自分に対する愛の告白と思い，求婚を受け入れるつもりでいた。しかし求婚の相手は自分ではなかった。潘起亮は小欧を愛していたが，大学を出て自己実現の場を求めて働く小欧と，社会のアウトロー的位置にいる自分とはつり合わないと強く母に戒められていた。彼は自分と大卒の小欧とは住む世界が違うとあきらめて，母が紹介する相手と結婚することにする。林一達と朱群英にも見られた社会的階層の差が，厳然たる溝として二人の間に横たわっている。

[何大海と陳青]

陳青と何大海は家も近く工場も同じ，妻の陳青は工場の模範労働者であり，同僚が仕事を平然とサボっているのが悔しくてたまらない。夫は工場の仕事をサボって潘起亮とともにブローカーの仕事に精を出す。そしてとうとう工場をやめて（82），ブローカー業に専念する。違法行為に手を出して摘発され，全財産を失ってしまうこともあるが，妻と娘を愛し，

一生懸命働く男である。陳青は国営企業が外国企業と合弁になったためにリストラされてしまうが，失意のどん底から立ち直って，地域で同じくリストラされた人たちを組織して買い物代行や生活サポートの仕事を始め（95），生きがいを見いだす。成長した娘は北京大学に入る。

［親の世代　林漢民・廖淑琴夫婦，陳福生・胡桂蘭夫婦］

林漢民は古くからの党幹部であり，文革の混乱期には仕事ができず，名誉回復で復帰したとたんに幹部若返り政策（83）で引退を余儀なくされるが，真面目一徹，一貫して党と指導者を信頼する気持ちは変わらない。87年，「国家建設を支援するため」株券を１万元購入。それが92年にはバブルで70万元になるが，林一達が勧めても売ろうとしない。権力を利用しての商売にのめり込む息子に対して怒りを爆発させる（85）。

林漢民：いい腕時計しているな。
林一達：気に入ったら使ってよ。日本製で，金メッキだよ。
林漢民：それも取引先からもらったんだろう。
林一達：お父さん，ビジネスで贈り物は当たり前ですよ。こっちからも贈っています。
林漢民：外人さんは自分の会社で，自分の金を使っているんだ。おまえたちは公金でプレゼントを買って，まわりまわって自分のものにしている。これを汚職というんじゃないのか。
林一達：政府機関ならそうかもしれないけど，公司だから違うんだ。うちの公司は一年で数千万元の利益を国にもたらしているんだ。だからそれくらいの金…
林漢民：おまえは国家の権力と財力を利用して自分のために公司をやって，高額の手数料を手にしている。おまえのような連中が年に数百万元も飲み食い遊びに使っとる。これが汚職でなければ何なんだ！この際おまえに言っておくが，自分が共産党員であることを忘れるな！
林一達：お父さん，身分が変わったんです。政府機関の幹部じゃなくて，公司の社長なんです。
（その後，妻との会話）
廖淑琴：みんな一体どうしたのかしら。お金のために，狂ったみたいになって。
林漢民：この国はずーっと貧しくて，ずーっと閉ざされていた。それが一気に開かれたときに，何を残して何を捨てるべきかもわからなくなってしまったんだ。…党中央が考えてくれるとわしは信じとる。少なくとも鄧（小平）さんや政治局の人は，わしなんかよりわかっているし，対策もあるはずだ。

陳福生は映画館の映写技師である。毎回必ず映画館の場面があり，その年に上映されてた

映画の1シーンが織り込まれている。「牧馬人」,「喜盈門」,「人到中年」,「小花」,「黄土地」,「紅高粱」,「君よ憤怒の河を渉れ」(76・佐藤純彌監督・高倉健主演),「マディソン郡の橋」,「タイタニック」…国内外の映画はその時代を映す鏡である。また映画自体の位置の変遷も描かれる。テレビが普及していく中で,映画館へ足を運ぶ人は減っていく。妻・胡桂蘭は古い世代の意識を代表する。国営の食料店に勤め,物不足のときも知り合いには便宜を図る。新しいものが導入されると拒絶反応を示すのだが結局は受け入れる。冷蔵庫が来れば電気代の心配をし,クーラーが来れば,「夏は暑いのが当たり前,暑いから夏っていうんだよ」と拒絶反応を示す。株ブームのときは取引所の電光掲示板の前で一喜一憂し,暴落で「下がることもあるなんて,聞いてなかったよ」と嘆く。連続テレビドラマがはやり始めた頃は「いいところになったらすぐ終わるんだから。明日テレビ局に文句言ってやろう」という。娘婿何大海が違法取引で連行されそうになると,へそくりを全部投げ出して許しを請う。家族を愛する母親である。

2

作者李暁明はかつて1949年の中華人民共和国成立から今日までを描く脚本を手がけたときに,50年代,60年代には時代環境を描くのに大きなエネルギーを注いだが,78年以降は一律に「今日」として描いたことがあった。しかし脚本製作の過程の中で,「過ぎ去ったばかりの20年も具体的に描く値打ちのある歴史といえるのではないだろうか」と気づいたという。作者は昨日のことのようでありながら昔日の感のある20年を描こうと思い立ち,図書館にこもって20年間の《北京日報》のマイクロフィルムを読んでノートを取ることに没頭した。

文化大革命の混乱の10年は毛沢東の死去と「四人組」の逮捕で終わり,鄧小平が指導権を握ることによって改革開放の時代が始まった。紆余曲折はあったが,中国が根本的に変わり,発展した20年であった。そして20年前と比べてみると,中国はまったく別の国のように変わってしまった。そしてその結果としての現在を肯定的に見る視点がドラマの基本姿勢としてある。作者はこう述べる。

> 《一年又一年》を見る人は30歳以上の人たちでしょう。劇の主人公は‘時間’です。私は視聴者自身の生活の変化を描きました。ドラマを見る人がブラウン管を指差して“あの頃私もこんな感じだった”と言ってもらうのが,私の狙う効果です[1)]。

この20年の社会生活の特殊性が一年一集(一回一年で20年を描く)の劇構造を決めたとすれば,その劇構造が劇(ドラマ)の内容を決めたといっていいだろう――私が重点的に描こうとしたのは登場人物の性格や運命やそこから生まれる悲喜交々ではなく,人間の運命

を通して「人間の生活」を展開させ，それによって無数の生活のディテイルから構成される「光陰（年月）」を展開させたかった。《一年又一年》の本当の主役は「一年また一年」なのだと言っていいだろう[2)]。

この連続ドラマの特徴は，一回が一年，78年から98年までを一年ずつ全21回で描く編年体であるということにある。45分の物語が終わると，次回は次の年に飛んでしまう。作者はストーリーを展開させにくい構造を設定して，20年の時代の変化を描こうとした。そしてストーリーで見せるのではなく，人間を描き，時代と歴史の流れを映し出すことに成功している。もちろん人物が単に時代を説明する道具となったのでは共感がえられない。人物像を明確に描き出すことによって視聴者の共感を得たのであろう。ドラマは20年の激しい変化のディテイルの記録であり，「ああ，そんなことがあったなあ，なつかしい」と今日の視点から余裕を持って回顧できるのが，中国の現在なのである。張志君と呉着輝はこうまとめている[3)]。

林平平一家は高級幹部の階層で，関心のある問題といえば古くからの幹部の名誉回復・原職復帰であり，党の最新の政策であり，指導部の人事異動であり，議論の話題は体制改革や人生の価値基準，文学の注目作，大学教育，アメリカの社会や文化などである。それゆえ林平平の兄林一達が四川の農村から連れてきた嫁である朱群英はこのような教養のある家庭の中ではかなりの間自分の本当の場所を見つけることができず，周囲の誰もが親切にしたのだが，この家に溶け込むことができなかった。まさにこのような地位と家庭との相違がもたらした劣等感が四川から出てきた娘を自立に向わせ，改革開放の環境のもと，個人の開業を奨励する政策指導の下で，朱群英は家庭を出て，働く自らの手で自身の存在価値を見つけ，林家の人心の中の本当の位置を確立させた。朱群英としゅうとめとの間の葛藤や夫との間の感情の変化は中華民族の伝統的倫理観念のよき伝承を示すとともに，新しい時代の人間の価値観の転換をも表している。

陳煥一家は典型的な北京の四合院の庶民の家庭である。彼らは林家と違って本当に普通の中国の庶民を代表している。彼らは関心を持つのは日常の生活必需品の値上がりであり，レイオフや再就職など現実的な問題である。陳家の婿である何大海は個体戸（個人経営者）になったので先に豊かになり，家庭電化製品も次々と新しくなる。そこに中国の庶民の家庭が一歩一歩，小康（まずまずの経済状態）へと進む過程をみることができる。

中心になる二つの家庭を階層が異なる設定にしたことによって，社会と時代を立体的に重層的に描くことができたのである。あまりにも変化が大きかったこの20年を具体的例で見てみよう。

○配給手帳や配給切符もなくなった。ものを買うのに行列の必要もなくなった。お金さえあれば自由に物を買うことができるようになった。
○まずは白黒テレビ，そしてカラーテレビへ。
○82年に冷蔵庫が入ってきて（それまでは冷蔵庫自体庶民の家ではまれであった），それが冷凍庫つき冷蔵庫にかわる。
○盥での洗濯から二槽式洗濯機，そして全自動洗濯機へ。
○食料品の値上げが噂され，買出し騒ぎが起きる。(79)
○サングラスのブランドのシールを貼ったままかけるのがかっこよかった。(80)
○ベルボトムのジーンズ，フラフープ，紅茶きのこ，ラジカセ，ポケットベルから携帯電話へ。
○それまでは外国人の服装だったスーツとネクタイが広まり始める。(83)
○北京を代表する高級ホテルは外国人及び華僑専用ということで，一般の中国人は入ることが許されない。(83)
○日本のドラマ「おしん」，日本占領下の北京を描いたテレビドラマ「四世同堂」（老舎原作）大ヒット。(85)
○陳家にも家庭電話がつく。(90)

李暁明が「戦争もなく，激しい社会的動揺もなく，大規模な大衆運動もなかったのに，十数年の間に中国社会は完全に変わってしまった」[4] と述べるときに，明らかに89年の反腐敗・民主化運動の高まりと北京の戒厳令の公布，中国人民解放軍による武力弾圧（「第2次天安門事件」）を意識的に回避していることに気付かされる。それはもちろん，事件が政治的に「動乱」と決め付けられている今日においてはやむをえぬことなのかもしれない。

八八年になると，「官倒（コアンタオ）」という言葉が流行語となる。これは官職にある人間がものをあっちこっちに転がして（中国語で「倒」）儲けることを言う。統制経済時代にいろいろな物資の価格が政策的に設定されていたのを，市場メカニズムに任せるようにするのが，経済改革の重要な一環であったが，このころは過渡期として「双軌制」という二重価格制が採られていた。つまり石炭とか鉄鋼とかの物資について，国の計画に盛りこまれる分は計画価格として一定に決められるが，それ以外は市場で自由に価格を形成させるという制度である。市場での価格はおおむね計画価格より高いから，そこに「官倒」が発生する。計画価格で手に入れたものを市場に横流しすれば，それだけで大きな利潤が得られるわけであるし，おりからのインフレの中で国の経済情報にいち早く接するだけでも，儲けのチャンスは大きくなる。この「官倒」に対する民衆の不満が，翌八九年の大規模な民主化運動の下地となったことは明らかである。

（田畑光永「鄧小平の遺産 ── 離心・流動の中国」岩波新書1995）

林一達もこのような「官倒」で大もうけした人間の一人であり，89年腐敗摘発で危うくなり，南の海南島へ何大海と共に逃げて行く。90年，海南島から帰ってきた何大海は，自分の家が取り壊されていることも知らず，呆然とする。再開発で下町の胡同（よこちょう）は取り壊しになり，陳家は新しい高層アパートに移っていた。古い四合院から新しいアパートへ，陳家の物語の舞台が変わったのである。ドラマは1年ごとにつながっているのだが，89年と90年の間には大きな断絶があり，民主化運動と武力弾圧は，林漢民が「この二三年社会が動揺する中で，落ち着いて地道に学問を続けるなんて，なかなかできることじゃない」と陳煥のことをほめる中で示唆されるだけである。

周囲の人物も時代を描くのに貢献大である。林林（林一達・朱群英の息子）はパソコンゲームに没頭する一人っ子である。「僕の許可なしに勝手に部屋へ入らないで」と言われて怒った林漢民は脳溢血の発作を起こしてしまう（97）。一人っ子政策の下の両親の離婚の増加，そして親と祖父母に甘やかされて豊かな物に囲まれて育った子供という現代社会の問題を反映している。陳福来（陳家の親戚の農民）が時々訪ねて来る。始めの頃は貧しくて物もなく，政治運動の再来を恐れていたのだが，やがて村営企業の社長になり，北京という大消費地の近くで近郊農業が成功し，どんどん豊かになって行く変化も間接的に描かれている。

3

中国においてテレビは，文化大革命終了後，改革開放の20年間に急速に普及したメディアである。

> 75年末の全国のテレビ受像機総数は46.3万台（そのうちカラー受像機は国産4000台，輸入品1900台）に過ぎず，人口8億としても，1600人に1台という普及率であったが，78年には総数が300万台に達し，81年には1500万台を突破，さらに83年3600万台，85年7000万台と急増し，87年にはついに1億台に乗り，本格的なテレビ時代が到来する。　（田畑光永執筆　岩波書店「現代中国事典」1999）

2002年の統計によれば，中国人は一日平均52分テレビドラマを見ている[5]。テレビドラマは現代の大衆文化を語る上で，重要で不可欠な要素であるといえよう。李暁明はテレビドラマについて，「すでに，晩御飯を食べてから寝るまでの間の不可欠な生活の一部になっている。ちょうど食事と同様に，毎回毎回贅沢な山海の珍味を並べる必要はないが，口に合って栄養がなければだめだ。われわれは一年に見る映画がたった一本でも差し支えないが，一年に一度しかごはんを食べないわけにはいかないのだ」[6] と述べている。小説や映画は読者や観客が，この本を読もう，この映画を見に行こうと主体的に選択して享受するものであり，「ごちそう」である。それに対してテレビドラマは，視聴者が受動的に享受する，日常

の家のごはんのようなものであるというのが作者の認識である。

> 中国大陸のテレビドラマは創作観念・表現内容・表現形式において映画や小説の影響から逃れられなかった。われわれのテレビドラマは単に長く引き伸ばした映画であり，画面のある小説であり，芸術的レベルは映画や小説を越えられなかった[7]。

これまでのドラマをこう概括する作者にとって，「一年又一年」はテレビドラマという制限された表現形式の中での新たな試みであり，従来の枠に対する新たな突破であった。

> テレビドラマのもうひとつの特徴は有効期限があり，地域限定であるということである。テレビドラマが後世に残ったり世界的な賞を受けたりすることはありえない。同じ時空に生きる人のために提供される一回限りのものである[8]。

しかしテレビドラマがその特性ゆえに国境・文化を越えて享受されうるものであることはいうまでもない。アジアでヒットした日本のテレビドラマ「おしん」「東京ラブストーリー」然りである。また韓国ドラマのブームは日本より早く，中国で起きた。「韓流」ということばも元は中国語で「韓流（hánliú）」と「寒流（hánliú）」の発音が同じであることから生まれたもので，韓国現代文化の海流の如き勢いを意味する。日本・韓国のテレビドラマ同様，中国のテレビドラマも決して李暁明がいうような地域限定のものではなく，異文化の壁を乗り越えて伝わりうる，伝える意義のあるものである。中華人民共和国建国50年を記念する作品としては革命史上の重要人物や重要事件を描くものが多い中で，「一年又一年」は，小さな家庭を通して激動の20年の大きな変化を描き出した点で高く評価された。文化大革命の鎖国状態から一転しての改革開放，そして加速度的な欧米文化の流入によって中国人の意識が変化する過程を映し，弱さを抱えながら，良心に従ってそこに生きる中国の庶民の心情をしっかりと描いている。「一年又一年」は，作者が「限定」に徹することによって「普遍」を獲得したといっていいだろう。

[注釈]

ドラマのテキストとしては北京電視芸術中心音像出版社・大恒電子出版社のVCD（ビデオCD）を使用した。例えば（80）は，そのエピソードが80年に起きたことをあらわす。

①「《渇望》編劇李暁明回望一年又一年」《北京青年報》1999·10·13

②，④，⑥，⑦，⑧ 李暁明「“昨天与隔世”――《一年又一年》創作随想」《中国電視》1999年第12期

③ 張志君　呉着輝「難忘歳月我們曾共同擁有　21集連続劇《一年又一年》観後」《当代電視》1999年第11期

⑤「中国電視劇市場報告2003－2004」華夏出版社　2004

[参考資料]

① 「用電視書写歴史《一年又一年》開創先河」《北京晩報》2000・7・12

② 李小龍「表現老百姓生活的変遷 ――「一年又一年」導演談」《FILM ART》2000年第1期

③ 「鄭暁龍電視劇産業七定律」《北京青年報》1999・11・15

④ 施旭昇「電視劇叙事節奏辨識 ―― 兼談電視連続劇《一年又一年》叙事節奏的営構」《中国電視》2000年第4期

⑤ 「電視劇《一年又一年》為老百姓作伝」《北京晨報》1999・9・22

⑥ 「頌歌与賀礼　評《一年又一年》」《当代電視》2000年第1期

⑦ 「許亜軍　原華主演力作《一年又一年》火了」《北京青年報》1999・10・2

⑧ ジェームズ・ラル「テレビが中国を変えた」岩波書店　1994

⑨ 岩渕功一編「グローバル・プリズム ―― <アジアン・ドリーム>としての日本のテレビドラマ」平凡社 2003

⑩ 弓削俊洋「テレビドラマ『渇望』と「渇望熱」」中国文芸研究会《野草》第51号1993